

次代を担う若手研究者育成の観点から 社会も研究者も余裕を持って。 理系の人材育成はもっと重要になり、国立大学が頑張る！

2016年9月26日、東京大学柏キャンパスの宇宙線研究所にて、2015年ノーベル物理学賞を受賞された東京大学特別栄誉教授 梶田隆章 宇宙線研究所長と 山口宏樹 埼玉大学長との対談が実現しました。二人はともに埼玉大学を卒業して東京大学大学院に進学、その後、それぞれ理学と工学分野の研究者の道歩んでいます。これまでノーベル賞受賞をお祝いする様々な会で顔を合わせてきた二人が、次代を担う若手研究者育成の観点から、研究のこと、学生の流動性のこと、国立大学の役割、埼玉大学への期待を語ります。



ノーベル賞受賞のニュートリノ研究に関連して。 カミオカンデは陽子の崩壊を見つけることを目的としてスタートした・・・。

山口学長 まずは、ノーベル賞を受賞されたニュートリノ研究に関連して、梶田先生のご研究についてお話を伺いたく思います。東大でしかできない研究に携われ、結果としてノーベル物理学賞を受賞されたと理解しています。

梶田所長 そう思います。

山口 そうすると、ノーベル賞受賞研究の特徴としては、個人ではできない大規模研究であるし、勝手な想像ですが、直ぐには答の出そうにない研究なのでしょうか。

梶田 そうですね。ニュートリノ研究というのは、他の研究に比べて時間スケールが長いと思います。

山口 長い時間スケールは今の時代ではなかなか許容されにくい。それは組織としてもそうだし、研究者個人としても、なかなか辛い問題ですよ。

梶田 そうですね。それは確かに若手の研究者にとってはちょっと辛いと思いますね。でも、そうは言いながらも、見る人は見ていてくれるので、どうにかなる部分はあるとは思っています。つまり、論文の数とかで一律でやられるとダメですけどね。

山口 その辺は、この宇宙線研究所の内部の雰囲気でもあるのでしょうか。

梶田 宇宙線研究所では、例えばポスドク研究員への応募が毎年数十人とありますが、論文数で足切りをすることは一切なくて、その人が何を研究してきて、どういう貢献をしてきたかをきちんと見て、かつ面接をして能力を見極めるということをしています。すぐに結果が出ない研究でも「やっているよ」と、そういう雰囲気は見せるようにしています。

山口 梶田先生が東大の小柴研究室に行かれたときは、宇宙線研究所はまだなかった？

梶田 いえ、既にありました。

山口 そのときから研究所付だったのですか。

梶田 いえ、小柴研に入って、カミオカンデをやっているときに、宇宙線研究所からも共同研究者としては入っていられていました。というか、宇宙線研究所は昔からカミオカのホストということでやっていました。

山口 そこで気になるのが、今ですと、何かと研究プロジェクトを起こそうとしたときに、「何を、どこまで、いつまでに」を必ず言わないとプロポーザルが通らないじゃないですか。そもそも当時、カミオカは、何をどこまで目指していたのでしょうか。

梶田 最初は70年代に新しい理論が提案されて、素粒子の力を統一すると陽子が壊れるはずだという予言がありまして、その理論が正しければ、確実に数年以内に陽子の崩壊が見られるという提案でした。

山口 それは数年以内を目論んでいたのですか。

梶田 そうです。

山口 実際には数年では済んでいないですね。

梶田 陽子の崩壊について言うと、カミオカが始まってから30年以上経過しますが、陽子の崩壊は見つかっていません。

山口 言い方は悪いですが、当時はそういうことでもお金が付いたし、組織として成り立っていたということですね。

梶田 ただし、これはものすごく重要な意味合いがあったので、今でも同じことを言っても通るようなものだと思います。

山口 そこで、これもお聞きしたかったことの一つなのですが、一つだけの研究テーマではなかなかやっつけていけないじゃないですか。つまり、時間を掛けていい研究だけでなく、ある程度の答が出そうな研究も同時にやるし、本当にどう転ぶかわからない研究の下準備もやるし、最終的な段階にある研究もするし、というのが普通のようにも思います。そういう意味では、カミオカのプロジェクトでは、主題はあるけど、副産物と言っていいか、そういったものはたくさん出たのでしょうか。

梶田 そうですね。ただし、何もしないで副産物が出たというよりは、ここは小柴先生が偉かったと思うのですが、実験を始めたらすぐに、太陽ニュートリノを観測するために装置の改造をしたいと言いだして、きちんと副産物が出せるように装置をいじってしまして、その点はとても偉いと思いました。

山口 目利きの先生が必ずいて、いい意味でのコーディネートがちゃんとできる人がいると、組織としても活性化するのだと思います。そういった組織の一員でいらした梶田先生ですが、これまで講演会等でのお話を伺っていると、偶然的な出会いというのはあったのでしょうか。

梶田 偶然の要素はいろいろありますね。

たまたまニュートリノの異常に気付き、方向転換できたことは良かった。 若い人が実験データを見て何かを見つける。若い人にこそチャンスあり！

山口 その偶然の要素も含め、梶田先生の研究上のご経験から、これからの時代を担う若い研究者にメッセージがあればお願いしたいのですが。

梶田 若い研究者へのメッセージを言える程の経験はありませんが、カミオカンデでは、最初は実験プロジェクトである陽子崩壊の探索に携わっていました。たまたまニュートリノの異常に気が付いたので、当時その問題を誰も気にしていなかったのですが、思い切ってそちらに方向転換できたことは良かったと感じています。

山口 そこが一番のターニングポイントですよ。なかなか決断しきれない研究者もいたはずですよ。

梶田 そうでしょうね。特に陽子崩壊っていうのは、物理の重要性がものすごく強いので、やっぱりそこに固執しようとするばしてしまふ。

山口 そうですよ。本来の目的でもありますし、そこから外れるというのは、相当な勇気が必要だったのではないかと思います。そこには誰か背中を押してくれた人がいたのでしょうか。

梶田 いや、たぶんいなかったですね。





山口 埼玉大学卒業式の私の式辞で梶田先生の話に触れた際、ノーベル化学賞を受賞された白川先生の話を持ち出しました。彼はセレンディピティという言葉が使われたのですよね。梶田先生の気付きはまさにそれと同じかかと、学生には紹介しました。ただ、セレンディピティというのは日頃の準備がなければ絶対に起きえないという話も当然しているのですが、そういった意味で直感的にくるものがあったのでしょうか。

梶田 もちろん、これは我々がとんでもない間違いをしているか、もしかしたら重要なことであるかは、最初からなんとなく分かっていたいました。

山口 それをやると決めてから1年間だったのでしょうか、実験精度の検証と計算を行ったのは。

梶田 理論は人がやっていたのをそのまま見ていただけなのですが、少なくとも、自分たちのやっていたことはどこにも大きい間違いはないなということは、1年間の中で確かめていました。

山口 そういう意味では、比較的短い期間で答が出たということですね。

梶田 その時点では、間違いでないだろうな、という答が出ただけですね。

山口 そのときに得た少しの差を根拠にして、ニュートリノ振動の存在を主張された？

梶田 可能性が考えられるという程度です。

山口 そのあと、ニュートリノ振動の存在を、確信をもって発表されるにはどのぐらい時間が掛かったのでしょうか。

梶田 そこから10年掛かりました。その前からカミオカンデで実験をしていたが、施設がそれほど大きくなくて、やりたいことが十分できなかったのでスーパーカミオカンデを待った、ということになります。スーパーカミオカンデがなければ、あと何年も掛かっていたと思います。

山口 そういう意味で、「地道にこつこつ」というのは適切な言葉ということでしょうか。

梶田 最初のきっかけを見つけたあとは、「地道にこつこつ」です。あとはやることは決まっているというふうに考えていました。

山口 計測値に重要なことがあると気付かれ、10年近く掛かってニュートリノ振動を実証したということですが、その10年間はそれだけに専念されたのでしょうか。

梶田 基本的には宇宙線研究所の雇用なので、スーパーカミオカンデを作るというのを名目上の本務でやっていました。

山口 スーパーカミオカンデの目的も、ニュートリノ振動の実証だけではない訳ですよね。ある意味、他の研究も抱えていたということなのでしょうか。

梶田 スーパーカミオカンデの準備をしながら、カミオカンデのデータ解析をして、ニュートリノ振動のことを少しずつやっていたという感じです。その比率は年とともに変わってきました。94年までは半々ぐらい、95年には1年間現地でスーパーカミオカンデの建設をしていたので、ほぼ100%ですね。

山口 なるほど。では逆に言うと、その年までには一定程度の目処はつけていたということでしょうか。

梶田 そうですね。94年にはスーパーカミオカンデにつなげられる論文を出せたので、カミオカンデとしての一定の区切りはつけられました。

山口 今のようなことを、今後の研究者ができますでしょうか。

梶田 今の年齢になって分かるのですが、もう自分では実験データを見ることはできない。ですから若い人がいろんな目で実験データを見て、何かを見つけざるを得ない。そういう意味では、若い人にこそチャンスがあると思っています。

山口 7月に国公立大学の学長が集まって議論する会議があり、東大で教授を務められたのちに私大の学長になられた先生が仰っていたのですが、今の研究者、特に大規模大学の研究者は即、答を出したがる、だからデータを見てじっくり考えることが少なくなっている、埼玉大学のような大学が頑張れとのことでした。

梶田 それってたぶん、今の日本がいけないのだと思いますね。結局、評価だったり、ポストクダ、なんだで、何人かの中から「勝ち抜け」とかだったり、そういう非常に余裕がない世界になってしまったので、若い人は自分が生き残るために論文を作らなくてはいけない気持ちが大きくなっていて。

社会がもっと余裕を持たないと！ 研究における「遊び」と研究者の余裕。

山口 それを変えるにはどうしたらいいのでしょうか。やっぱり、社会の考え方を換えなければいけないのでしょうか。

梶田 大きくは、社会がもっと余裕を持たない限り、ダメだと思います。もちろん、宇宙線研究所としては世の中の流行にあまり左右されたくないです。ただ、少数派でやっていくだけでは大きな流れを変えられないですね。

山口 そうですね。結局、初めにお話しいただいた、この研究はすぐには答がでないかもしれないけれど間違いなく重要ということ、しっかり理解することのできる社会を作らなくてはいけないということですね。

梶田 そうですね

山口 あえて国立大学の話をするれば、国立大学はある意味、税金でまかなわれていることから、社会への説明責任も出てきて、成果を求められる構図ですね。日本の経済がこういう状態だから国立大学の状況も一層厳しくなって、大学ランキングで一喜一憂させられ、悪循環になっているように感じています。その点で何か思うところはありますか。

梶田 大学ランキングというのは、ランキングを作るほうがウェイトを好きなように設定していて、あれで一喜一憂してはいけないと思います。いい手はないかなあ。

山口 梶田先生が院生であった当時の大学院研究科の状況・雰囲気はいかがでしたか。今よりはのんびりしていたとは思いますが。

梶田 今より明らかにのんびりしていましたね。

山口 それこそ、余裕があったのでしょうか。

梶田 余裕というのでしょうか。例えば、先生方からしてのんびりというか、余裕があったといえますか。これを言ったら申し訳ないけど、昼寝をしていた大先生もいましたし、そのくらいの余裕がある時代だったんだと思いますね。

山口 成果、成果と言われなかったのはありますよね。

梶田 そこまでは言われてないでしょうね。私たち大学院生も、そんなこと気にしてなかったですからね。

山口 埼玉大学大学院の人文社会科学研究科に、とても活躍している若手女性研究者がいて、外部資金もかなり獲得してバリバリやっているのですが、問題は時間がないという話をしていました。彼女の場合は成果も出せるし、外圧的なものはねのけられると思いますが、そういうことを全部こなすからなのか、大学システムの複雑化もあり、とにかく時間がない、ということです。その点、宇宙線研究所の所員に方々はどうでしょうか。恵まれているほうですか。

梶田 恵まれているほうだとは思いますが、多少なりとも時間がないのはありますが、例えば、毎年文科省に出す報告書はURAの職員にまとめてもらうとか、今はそれでやれているので。

山口 ちなみに、宇宙線研究所では、URAはどのくらいの比率でいるのですか。

梶田 1人です（教授会メンバー20人に対して）。

山口 1人ですか、大変そうですね。

梶田 そのほかに広報室が別にありますし、そんな感じである程度回っています。昔は、教員が全部やっていましたが、それに比べれば多少は良くなったとは思いますが、もう昔には戻れないですね。

山口 本郷の大学院研究科とは体制が異なるのですか。

梶田 URAは研究大学強化促進事業での10年プログラムで雇い始めたものですので、体制はあまり変わりません。

山口 URAは身分保障が今後、問題になりますよね。

梶田 そうですね。身分保障がないのが、URAの問題の一つだと思います。

山口 話は変わりますが、先週、学位授与式を行って式辞を述べました。東日本大震災から5年半経っても、復興は未だに道半ばであること、このところ自然災害が多いことを話のきっかけに、内閣府が創設した「戦略的イノベーション創造



プロジェクト（SIP）」の課題の一つに「レジリエントな防災・減災機能の強化」が取り上げられたこと、それをベースに、第5次科学技術基本計画には「超スマート社会の実現」Society5.0が謳われていること、それを受けて、経団連が、新たな社会や経済の実現には5つの壁の突破が不可欠であるとしたことを紹介しました。その一つに社会受容の壁があり、技術革新がいくらすごいものであっても、社会から受け容れられなければ、また例えば、個人の幸せが何なのかをしっかりと考えること抜きには、社会変革はできない。つまり、学問は理系だけではなく文系も一緒にやっていく必要がある、とされています。そこで、1年前の文科大臣からの通知に端を発する文系学部廃止騒動に触れ、東京大学の吉見俊哉教授の著書「文系学部廃止」の衝撃（集英社新書、2016年）を引き合いに出しました。彼は、大学の知には、特に文系の場合は、有用性だけではなく遊戯性が必要であるとしています。この点について、私は理系の学問にとっても間違いなく遊戯性が重要だと思っているのですが、梶田先生はどのように考えられますか。

梶田 いわゆる「遊び」の部分がない限り、世の中、うまく進んでいかない。今はあまりにも効率重視のため、非常に生きにくい世の中を作っている。長い目で見たとき、健全な発展に繋がらないのではと思っています。

山口 所長として、所員に「遊べ」と言っていますか。

梶田 言っていません。かといって、一方でガチガチに研究をするように言っている訳でもありません。

山口 ちなみに、梶田先生は若い頃、「遊び心」を持って研究をされていましたか。

梶田 「遊び心」というよりも、余裕を持っていたと思います。一生懸命研究をやっているけれど、精神は余裕を持っているといった具合に。

山口 当時は、いったん大学の教員になってしまったら、将来、自分のキャリアについて心配する必要が無かった。

梶田 それは絶対に大きいです。今は逆に振れすぎていますね。

山口 そうですね。今は余裕がなさ過ぎて成果が出なくなり、ランキングも下がっていき、悪循環になっていく。

梶田 だから、もっとランキングを上げるために、もっと効率を上げるよう求められる。

山口 効率を上げるために、仕事が増えていく。逆なんですよ。

学生の流動性については、あるところで場所を変えるということは重要！ 振り返ってみると、やはり東大大学院に入った時は違うものを感じた。

山口 「遊び」と反するかも知れないが、私自身は、色々な大学を知ることは間違いなく有効だと思っています。しかし、今の時代は各大学が大学院を持つようになり、学生を困らせてしまい、いい意味での流動性が失われているような気がします。本当の意味での流動性を上げていくと、各大学の役割が決まってくるような気がするのですが。つまり、埼玉大学の立ち位置として、自らは大きな頂にはならないが、裾野をしっかりと維持する大学の1つとして、学生の流動性を保っていく。ただし、埼玉大学も下支えだけではなく小峰を作って、教員のモチベーションを上げる、といった具合にです。国立大学協会（国大協）での将来構想検討の際に話題になったが、私学は研究、特に理系の研究を支えるのが難しい状況であるため、国立大学は私学の有能な学生の受け皿として日本全体の流動性を作り上げ、それがうまく回ると、もしかしたら余裕ができるかも知れません。

梶田 あるところで場所を変えるということは重要だと思います。振り返ってみると、やはり東大大学院に入った時には違うものを感じました。

山口 私も埼大から東大大学院に行ったことで世間が広がったというか、大きなプロジェクトに関わる機会が間違いなく増えました。私の場合は橋が専門ですが、当時は本州四国連絡橋プロジェクトがあって、東大土木に橋梁研究室があってそこに入ったんです。そこにいたからこそ、埼大に戻ってからもそのツテでネットワークに入り込んで、それなりの位置でやれますし、学生も恩恵を受けているはず。一カ所にとどまっていたらそれは絶対できないことですし、そういう意味でも流動性は重要ですね。



日本はもっと理系ドクターを輩出すべき。だから国立大学が頑張る！

山口 梶田先生は、今も東大大学院の研究科に関わっておられるのでしょうか。

梶田 大学院の物理専攻の関わりを通して、大学院生を受け入れています。

山口 今の物理専攻の院生について、他大学からの受け入れ比率はどれくらいですか。

梶田 たぶん、半々くらいですね。

山口 それは、重点化した時から一気に定員を増やしたことで、そうなっているのですか。私学出身もいますか。

梶田 1割程度だと思いますが、います。

山口 国立が日本の研究を支えている点については間違っていないのでしょうか。

梶田 そうですね、国立出身の大学院生が圧倒的に多いですね。

山口 国大協では、国公立に関係なく今後の高等教育がどうあるべきかの議論をしていますが、やはり国立大学はなくなるだろうと。かといって、社会人の再教育は重要視されるものの、当面は18歳の人材育成を大学が担うとすれば、マジョリティは私学にある状況で、国立大学はどんな人材の育成が必要なのか。その点をしっかり定めないと国立大学の意義がなくなる。そう考えると、研究をベースに人材育成ができることが国立大学の強みであり、それをミッションとして存在意義を示していくべきと考えますが、梶田先生はいかがですか。

梶田 私もそう思います。特に理系の場合、研究を通して人材育成をしようとする、どうしても国立大学が中心になってやらざるを得ないのが現状。研究者になるかは別として、理系の人材育成は今後もっと必要になる、ならなければいけないはずで、日本はもっとドクターを輩出すべきだと思う。だから国立大学が頑張らざるを得ない状況なんです。

山口 ドクターの数は間違いなく減っているので、由々しき問題ですね。

梶田 非常におかしなことが起こっていますよね。世界の認識と全く反対のことが日本では起きている。

山口 研究所と大学院は違いますが、研究所も人材育成を担っているのは間違いないので、どうすれば研究所が受け持つドクター数を増やせますか。将来の不安な学生は間違いなく多いですね。

梶田 学生は不安だと思いますね。定職につけないことはものすごく不安のはずですし。

山口 梶田先生の院生は、基本的には、研究者になりたい人ではないのですか。

梶田 ドクターをとれば研究者になりたいのだと思います。マスターですと半分ぐらいは就職ですね。

山口 ドクターで、研究者ではなく、高度専門職に就いている人はいますか。

梶田 ある程度、います。

山口 ドクターになっても社会の中で企業人として活躍できる人が増えないと、ドクターも増えていかないと思います。



梶田 この点、大学だけではなく、企業側にもどれくらい役に立つのかを分かってもらわないといけない。

山口 それは、大学側にも反省すべき点があると思います。

梶田 リーディング大学院のフロンティアサイエンスに関与しているのですが、博士学生が企業で研修するプログラムがあり、結構いい反応を企業側からもらっている。博士課程のうちに、いろいろな学生がこのようなプログラムを受けられるようになれば、学生自身の道も広がるし、企業側にもメリットがあります。

東京一極集中が日本の脆弱さを作り出している？ 地方への流れは国立大学が。



山 リーディング大学院の予算は大規模大学しか獲得できていないのが現状で、埼玉大学では自前でやろうとしています。運営費交付金の重点支援で「世界に伍して戦う大学」を選んだ大規模大学は、経団連のいう、組織対組織の産学官連携を強化して、大企業からの資金を獲得できる可能性があります。中規模・地方大学にはなかなか回ってこない。地方大学は地域の優良な中小企業と連携して、地域を活性化するような動きが必要。一つは共同研究で新しい製品をつくったり、産業を興したりする中に、学生を巻き込んで、企業で活躍できる人材育成をしていく。小規模ですが、リーディング大学院のプログラムのような取組を検討しています。企業と結びつくとやはり成果を求められる、そこが難しいところですが、それこそ中小企業には余裕はないでしょうから。日本全体で産学官の取組を実質

化していけば、何か流れが変わるのではないかと期待していますし、変わらないと大学は財政的に厳しいと思います。

梶 話は聞いているが、宇宙線研究所はその点、恵まれていると思います。

山 大規模と中規模、中央と地方など、国立大学が同じような動きはできない。「選択と集中」でしょうか。

梶 「選択と集中」という言葉は近頃、安易に使われているので気に入らないのですが、なんと云ったらいいか、それぞれに最も適したやり方を考えていくということでしょうか。

山 国大協の将来構想ワーキングの話題でありましたが、「国立大学の多くが総合大学である必要があるのか」という意味での「選択と集中」です。つまり、東大には宇宙線研究所があって成果を出しているように、そこまで大規模じゃなくても埼玉大学に「この分野にこの先生が集まっている」とすると、その研究をやりたい人に埼玉大学に来てもらえれば、とそういう意味です。分かり易い例は教育学部で、教員の需要が減りますので現在の学生定員が過剰であって、今後、段階的に定員を減らしていきます。今までの教育学部はフルスペックで、全部の教科科目に教員を配置していたが、学生定員の減に伴い教員定員も減らす必要があり、全ての教科科目を1大学でまかなうことは無理になって、大学による連携が必要になってきます。学部単位での選択と集中をしたうえで連携をしていく動きは今後、具体化していく気がしています。大学全体として、総合大学にせずにある分野の学部をここに、という議論はないことはない。その点どう考えますか。

梶 確かに、先程の人材の流動性の観点からしても、例えば、大学院に進む時に、本来であれば特徴あるところに行きたい、やりたいことができるところに行きたい、それが見えるようになっていた方がいいですね。そういう意味で各大学が特徴を出していくことは良いことだと思います。

山 国大協が企画する今回の対談の目的の一つに、国立大学の状況をステークホルダーに伝えることも含まれています。国立大学のステークホルダーは多岐にわたりますが、税金で研究をしている点で、研究のステークホルダーは国民全般だと思うのですが、そう考えたとき、国立大学はどうあるべきでしょうか。

梶 思うのは、日本の将来を考えたときに、東京一極集中が日本の脆弱さを作り出しているのではないかなと思う。じゃあ、もっと地方となったときに、地方への流れをつくりだせるのは国立大学しかないと思う。その意味で、国立大学が日本全体で活力をもって進んでいかないと。日本の国全体を考えたときに、とても重要な役割を持っていると思っています。

山 そのときに気になる国の動きとして、COC+（地（知）の拠点大学による地方創生推進事業）があり、その目的の一つは、極論すれば、地方の県内高校の生徒を県内の大学に入れ、県内の企業に就職させて活性化するというもの。

梶 それだけ見れば、とんでもない、あり得ないですね。

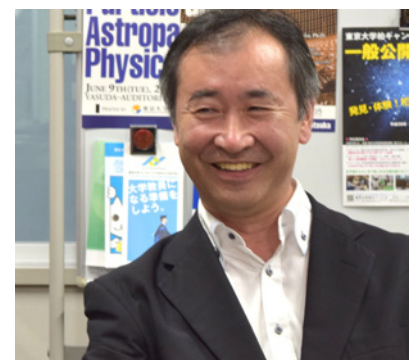
山 地域のことを知ることは悪いことではないので、COC+に採択にはならなかったものの、埼玉大学も取り組んでいます。

梶 貼り付けるのではなく、魅力をつくっていくことをやらなければいけないはずだと思います。

山 そうですね、極端というか。

梶 そうそう、いかにも短期的なものを狙っている感じがですね。

山 富山のスーパーカミオカンデと東京大学で人の流動はあるのですか。地域活性化の役割をスーパーカミオカンデは果たしているのでしょうか。



梶田 たぶん飛騨市はスーパーカミオカンデ、KAGRA（かぐら）を地域活性に役立てたいと思っています。その意味で材料は提供できているが、実際どうなのかは別の問題。それだけだとうまくいかなくて、もう一つ地域からも何か打ち出さないといけない。漠然としてますが、それを拠点に連携した高等教育、つまり大学のようなものができてほしいかなと思います。

埼玉大学へのエール： 研究面で若い人を引きつけるため、周りから見える研究集団が必要！

山口 最後になりますが、学長となった私には、母校は輝いて欲しいという強い思いがあります。梶田先生ご自身の経験からして、埼玉大学の今後の立ち振る舞い方について、何でも良いのでサジェスチョンいただければとても嬉しいです。

梶田 たぶん、研究という面で若い人を引きつけるとなると、ある程度、周りから見える研究集団が必要だと思いますが、それを全分野でやることは不可能だと思いますので、なるべくその見える部分を作っていくことが必要かと思います。

山口 見える部分を見せる必要がありますよね。

梶田 それは必ず必要ですね。

山口 宇宙線研究所の広報はしっかりしているのでしょうか。

梶田 ある程度、しっかりしていると思います。柏に2人、カミオカンデにもいる。本当はKAGRAにも欲しいが予算の問題でつけられていない。

山口 私と高校が同窓の、ある国立大学の学長が、大学を受験する際、埼玉大学の生物の先生の研究を見て「この研究、面白そうだから埼玉もいいな」と本気で思った、そういうことが増えればいい、という話をされていました。それはレアケースだと反論しつつ、そういうふうに向けるのは一つの戦略ですよ。

梶田 おそらく、大学に入る時にそこまで見るのはレアケースで、大学院とか、ポストドクとかに上がっていくにつれて、本当に研究を見るようになってくるので、そこで学生を集められる大学にするか、ということだと思います。

山口 平成 25 年度に大学強化推進補助金を得て埼玉大学が打ち出した改革の一つは、研究力強化。大学の基盤としてはやはり研究力の強化だと。特色や強みがある研究分野を選んで補助金を充てています。ただ、学内のコンセンサスを得るのは大変でした。その時は理事だった私が矢面にたたされ教授会を回って説明をしましたが、日頃から研究を一生懸命にやっている先生から「執行部は日陰をつもりですか」と言われたりして辛かったです。ただ、「日向は作るけど日陰をつもりは無い。日向を作ることで全体の底上げができ、全体がしっかりしてくる。同じ所にいつも日向があるわけではなく、次はあなたに日が当たるかもしれない」と答えました。そういう考えで進めていますが、現実はなかなか厳しいです。

梶田 それはそう思います。

山口 今日はありがとうございました。私としては研究者に戻った気持ちで大変楽しく、嬉しかったです。

梶田 宇宙線研究所までお越し頂き、有難うございました。



(埼玉大学生時代は梶田先生が弓道部、山口学長がバドミントン部。185cm の長身二人が笑顔で、対談の最後にご挨拶と握手。)